

第4学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「冬の楽しみ」 教材名「冬の楽しみ」

2 単元の目標

様子や気持ちを表す語を増やし、季節の様子を表す文の中で使うことができる。伝えたい様子が明確になるよう、表現を確かめて文を直すことができる。言葉の働きを確かめ、友達との交流を基に自分の学習を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①様子や気持ちを表す語を増やし、季節の様子を表す文の中で使っている。（〔知識及び技能〕(1)オ）	①「書くこと」において、伝えたい様子が明確になるよう、表現を確かめて文を直している。（B(1)エ）	①学習の見通しをもち、単元で確かめたいことに進んで取り組み、友達の言葉や自分の記録を基に、読み方・表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

（1）単元について

季節を表す語を身近な経験と結び付け、音・色・動きなどの違いが伝わる文にする。行事を知っているかだけで評価せず、語を選んだ理由を確かめる。学習指導要領のB(1)エを中心に据える。関連する知識・技能として〔知識及び技能〕(1)オを、言語活動の中で確かめる。年間指導計画の重点項目は知識・技能である。本案では、身に付けた知識を文や話の中で使う言語活動に対応する思考・判断・表現の事項も関連付けている。

（2）児童について

（学級の子どもの様子を先生が書く）

（3）指導について

身近に見聞きしたものを、見たこと・聞いたこと・感じたことに分ける。独自例「風が吹いた」と「冷たい風がほおをかすめた」を比べ、付け加えた語が何を伝えるか説明する。経験がなければ教師が示す資料の観察で書く。冬の観察では、空気の冷たさや音の聞こえ方など自分が確かめられた特徴を選ぶ。地域に雪があると決めず、実際の経験や資料にある様子から書く。おおむね満足できる状況は、伝えたい様子が明確になるよう、表現を確かめて文を直しているという姿で捉える。語句や本文を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。

5 指導と評価の計画（全2時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○季節の語を身近な経験や資料と結び付ける。冬の空気や音などから印象に残った特徴を選び、触覚や聴覚を表す語を比べる。	学習状況を見て支援する。
第2次	2 （本時）	○様子を伝える文章を書く。読み合って説明の足りない部分を直す。	思①（発言・学習記録）



6 本時の指導 (2/2)

(1) 本時の目標

伝えたい様子が明確になるよう、表現を確かめて文を直すことができる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・ 予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	本時に使う教材・前時までのノートを確認、自分の最初の考えを短く書く。 ○「季節の様子を知らない人にも伝えるには、どの言葉を加えるとよいですか」 【めあて】季節を表す語を身近な経験と結び付け、音・色・動きなどの違いが伝わる文にする。 〈予想される児童の反応〉 ・ 色だけでなく動きを表したい。	本時に考える対象を確認し、既に分かったことと、今日確かめたいことを分ける。児童の最初の言い方を残し、まとめて比べられるようにする。
展開 (分)	○「季節の様子を知らない人にも伝えるには、どの言葉を加えるとよいですか」 様子を伝える文章を書く。読み合って説明の足りない部分を直す。 観察した場面、選んだ季節の語、様子を詳しくした短い文章。 自分が選んだ言葉とその理由を相手に説明する。聞き手は、意図した意味が伝わった箇所と確かめたい箇所を返す。 〈予想される児童の反応〉 ・ 色だけでなく動きを表したい。 ・ 同じ寒いでも場所によって感じが違う。 ・ 友達の言葉から別の場面を想像できた。	身近に見聞きしたものを、見たこと・聞いたこと・感じたことに分ける。独自例「風が吹いた」と「冷たい風がほおをかすめた」を比べ、付け加えた語が何を伝えるか説明する。経験がなければ教師が示す資料の観察で書く。冬の観察では、空気の冷たさや音の聞こえ方など自分が確かめられた特徴を選ぶ。地域に雪があると決めず、実際の経験や資料にある様子から書く。 想定するつまずき：季節の語を並べるだけで見た場面が伝わらない、経験していない行事を経験として書く。 児童の考えを教師の想定した言い方にそろえない。理由が確かめられる考えは残し、根拠が異なるときはその違いを板書する。 ◎思① 伝えたい様子が明確になるよう、表現を確かめて文を直している。(発言と学習記録)
まとめ (分)	【まとめ】今日確かめた言葉や表現と、それによって分かったことを対応させて自分の言葉でまとめる。 学習前の考えと比べ、付け加えたこと、残したこと、その理由を記す。 〈予想される児童の反応〉 ・ 友達の考えを聞いて、自分の理由を詳しく説明できた。 ・ 友達の言葉から別の場面を想像できた。	まとめの文を先に与えて写させず、児童が本時に扱った具体的な言葉を入れる。書くことが難しい場合は口述を記録する。次の学習では、その記録を使って自分の表し方を確かめる。 ◎態① (学習前後の記録と、見直した理由)

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

右端に題名と本時のめあて。その左に問い「季節の様子を知らない人にも伝えるには、どの言葉を加えるとよいですか」。中央は根拠となる言葉・本文の箇所と、そこから考えたことを上下に対応させる。根拠の本文は先生が教科書から書き入れる。中央から左に児童の考えを並べ、同じところを囲み、違いの理由を線で結ぶ。左端に、本時で確かめた具体的な言葉を含むまとめと、考えを見直した理由を書く欄を置く。縦書きで右から左へ学習の順をたどれるようにする。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

